黒子のバスケ ifストーリー 「もし、黒子が桃井の事を好きだったら」

和泉春

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

もし、黒子が桃井を好きで、
桃井は本当は青峰が好きなはずなのに、
黒子が好きだと勘違いをしていたとしたら…。

二人の幸せを願う純粋な気持ちの中に、
自分勝手な感情を見つける黒子。

「あそこに立っているのが自分だったら…。」
後悔しつつも、黒子は覚悟を決める。

次々と才能が開花して行き、
バスケの絆を忘れた仲間達との遠い思い出と、
桃井への儚い思いを胸に、
黒子は誠凛高校へと進学する。

また皆で笑ってバスケをする為に…。
彼は、戦う事を選んだのだ。

目次

笑っていて
ありますよ、多少は ―― 1
大事にしてあげて下さい ―― 5
勿論です。 ―― 9
眩し過ぎます ―― 13
僕らはまだ
良かったですね ―― 19
幼馴染みって、何なんでしょうね ―― 24
お邪魔します ―― 28
そのままの意味だと思いますよ ―― 32
僕の光
楽しいですか？ ―― 36
嬉しかったです ―― 39
見つかりましたか？ ―― 43
僕も知りません ―― 48
光と影
僕は影になったんです。 ―― 52
どうして ―― 57
辛いですよ。 ―― 60
大好きだったんです ―― 63
好きでしたよね ―― 66
大分楽になりました。 ―― 69
覚悟なんて、とっくの昔に出来ています。 ―― 72
片鱗

君達を祝福できるようになるために。 ―――― 75
少しだけ、 ―――― 78
大好きでした ―――― 81

笑っていて
ありますよ、多少は

帝光中学校時代、
僕が一軍に上がってしばらくたったある日。
桃井さんに告白された。
「私、テツくんの事が…好き‼」
素直に嬉しかった。
でも、彼女の感情と僕の感情は少し違っていた。
彼女は勘違いしているんだ。
僕はもう、その事に気づいていた。

「ありがとうございます。僕も、好きですよ。」
「…テツくん‼」

だから…。

「でも、僕の『好き』と桃井さんの『好き』は、
少し違います。
だから、早く気づいて下さい。
その時、僕からまた言いますから。」

そしたら、今度は僕が振られるのだろう。

「え？待ってよ、テツくん…？
テツくん!!!」

居た堪れなくて、その場から逃げてしまった。
それでも翌日、彼女は今までどうりに接してくれた。
ホッとした半面、ガッカリした。

自分から言っておいて狡いと思うかもしれないが、
やはり彼女にとって
僕はそのぐらいの存在でしかなかったと言う事を
思い知らされた気がした。
休憩中、僕が小さくため息をはくと、
それに気づいた黄瀬くんが声をかけて来た。

「どうしたんスか？黒子っち。
　ため息なんかついて。」
「いえ、何でもありません。
　練習を再開しましょう。」
納得しない様な顔をしながらも、
黄瀬くんは「はいッス。」と答えた。
僕が立ち上がろうとした時不意に、
青峰くんと桃井さんが話しているところが見えた。
ボールを片手に持った青峰くんが、
桃井さんに笑って技を見せると、
桃井もそれにつられて楽しそうに笑った。
とても眩しかった。
とてもお似合いだったから。
二人に気づいた黄瀬くんが、正直な感想を口にした。
「本当、他所から見たらカップルッスよね。
　青峰っちと桃っち。
　あのお似合いさには、
　オレが桃っちと並んでも勝てる気しないッスわ。」
二人を眺めながらそうつぶやくと、
黄瀬くんは背伸びをして僕に言った。
「あ～…。オレも彼女欲し～‼っなんて。
　黒子っちも、思ったりするんスか？」

悪気のない様子の問いかけに、少し戸惑ってしまった。

「ありますよ、多少は。」
「マジッスか‼以外ッス!!!」
「笑うの、やめて下さい。」

吹き出して笑う黄瀬くんに少し腹が立ったが、
今はそれどころでは無かった。
腹が立つ事よりも、
落ち込んでいる事の方が大きかったから。

「黄瀬、黒子。何をしているのだよ。
　さっさと練習に入れ。」
「はい。」
「はいッス。」

緑間くんに注意された僕達は、急いでコートへ向かう。
その時。

「テツくん!!!」

予想外の声が僕の名前を呼んだ。
その声の方へ振り返ると、
桃井さんが小さく微笑んでいた。

「練習の後…ちょっといいかな？
　話したい事があるんだ。」

僕はその時、覚悟を決めた。
このままではいけない。
自分も、桃井さんも、このままでは前に進めない。

「はい。分かりました。」

大事にしてあげて下さい

練習後、僕はロッカールームで着替えをしていた。
隣では黄瀬くんが、携帯を片手に着替えをしている。
後ろでは緑間くんが、着替え終えて眼鏡を拭いていた。
するとそこに、練習で汗だくの青峰くんが入って来た。
着替えるつもりはなさそうだ。
青峰くんはタオルと飲み物を持って、
入って来た扉に手をかける。
ふとその手に見慣れないものを見つけた。

「青峰くん。それは…？」

僕の突然の質問に、
ビクッと体を震わせた後に返事をする。

「テッ、テッ!?…ビックリさせんなよ。
あぁ？それって…？」
「その腕の…。」

僕は青峰くんの腕のミサンガを指差した。
青と白と黒の三色の斜めのストライプ模様で、
あまり綺麗とは言い難い代物だ。

「あぁ、これか？
これはさつきがさっき渡して来たんだよ。
なーんか、腕の御守りだとか言ってたけど、
付ける意味あんのかぁ？」
「そう言う割にはしっかり付けてるんですね。」
「うるせーよっ。
あいつが無理やり付けてきたから

取れなくなったんだよっ。」
青峰くんは半分照れ隠しの様に言葉を尖らせた。
それを聞き逃さなかったのは黄瀬くんだ。
「え〜!!
青峰っち、桃っちにミサンガ貰ったんスか!?
いいな〜、オレでも女の子達から貰った事ないのに。」
「黄瀬くん、サラッと自慢するの、やめて下さい。」

僕の鋭いツッコミに黄瀬くんは
「あんまりッス!!」と反論した。
しかし、僕の意識はミサンガに戻され、
黄瀬くんの声はあまり聞こえなかった。

「どうした?テツ。」

ミサンガを見つめてぼうっとする僕を覗き込むようにして見つめる。

「いえ…桃井さんらしいなと思って。
大事にしてあげて下さい。」
「お、おう…?」

僕の笑顔に疑問を抱きながら、
青峰くんはロッカールームを出て行った。
僕は着替え終えて、
バックを持って帰ろうとすると

「黒子っち!!今帰りッスか?
一緒に帰ろ?」
「いえ、今日はちょっと…。
桃井さんと約束がありますので。」

「桃っちと?」

一瞬キョトンとした黄瀬くんは、
少し黙り込んだ後、
ニヤリと顔の頬を緩ませた。

「了解ッス〜!!
じゃあ緑間っち!!一緒に帰ろ!!」

バックも持って
帰ろうとする緑間くんに矛先を向けた黄瀬くんは、
強引に肩を掴んで逃がそうとしない。

「何だ黄瀬、離せ!!」
「早く行くッスよ、緑間っち!!」

言い争いながらも、二人はロッカールームを一緒に出て行った。

一息ついたあと、
僕はロッカールームの中央にあるベンチに
腰を下ろす。
ぼうっと、
青峰くんの言葉を思い出しながら
天井を仰ぐ。
桃井さんが、青峰くんに、
ミサンガの御守り…。
前日の練習試合で、
青峰くんは相手チームの選手に
右腕を故意に殴られると言う事があった。
試合に負けた腹癒せに、
と言うくだらない理由で。

挑発的な事を言った
青峰くんも青峰くんだが、
殴る事はないと思う。
大した怪我には至らなかったが、
今日の青峰くんは
少々右腕を庇いながら
プレイしているように見えた。

僕は上を向いたまま目を閉じる。

相棒の僕でさえ、
プレイでしか相手の調子を
知ることが出来ないのに、
桃井さんはもっと早くに、
昨日のうちから気づいていた。
恋愛感情でも、友情でもない何かが
あの二人にはある気がした。

幼馴染みって、なんなのだろう。
あの二人の間には、入りこめない。

するとその時、
ロッカールームの扉が開かれた。

「テツくん。練習お疲れ様。」
「桃井さん、お疲れ様です。」

勿論です。

少し沈黙が続く。
僕が口を開く前に、
彼女の方から台詞が出てきた。

「あのね、テツくん…。
昨日言われて、
いろいろ考えてみたんだけど
まだよく分からなくて…。
テツくんは…どう考えてるの？」

「…。
僕からは言わない方が
いいと思います。
本当に好きな相手って言うのは、
自分で気づいてこそだと思います。
…桃井さんの気持ちは嬉しいです。
でも、だからこそ、
間違ってほしくないんです。」

「…。テツくん…？」

何と無く、吹っ切れた気がした。
今なら言える。
今までないくらいの
精一杯の笑顔を向けて僕は彼女に言った。

「桃井さんには、
幸せでいてほしいんです。
桃井さんが幸せなら、
僕も幸せですから。」

「テツくん…。

じ、じゃあ!!
テツくんは私のこと、
嫌いじゃ、ない？」
「はい。勿論です。」
「ん…。分かった。
何と無くだけど。
ありがとう、テツくん。」

そう言って、
彼女は笑って出て行った。
その笑顔は、
今まで見てきた笑顔の中で一番
綺麗だった。

翌日、いつも通りの桃井さんに、
僕はちゃんとホッとする事が出来た。
それで良かった。
いろいろなものが吹っ切れて、
真剣にバスケに集中出来る。
僕はボールを構えて、
ゴールに向かって投げ上げる。
ガンッ
「あ。」
ボールが下に落とされ、
床にバウンドしている音と同時に、
桃井さんが小さく笑っている声が聞こえる。
何と無く恥ずかしくて、
少し口角が緩んだ。

練習を終え、帰る支度をしていると、桃井さんが話しかけてきた。

「テツくん!!今帰り?」
「はい。」
「皆で一緒に帰ろうよ。
待たせてるから。」
「分かりました。」

桃井さんと体育館を出て正門に向かうと、
青峰くんに黄瀬くん、紫原くんと、
珍しく赤司くんと緑間くんの姿もあった。

「勢揃いですね。」
「そうだね。」

二人で微笑み合っていると、
黄瀬くんがこちらに気づいた。

「あ、黒子っち〜!!桃っち〜!!」

黄瀬くんは大きくこちらに手を振っている。
僕達はそれに急かされて
小走りでそこへ向かった。
手を振る黄瀬くんの隣には
青峰くんがこちらを見ていて、
またその隣で緑間くんが
呆れたようにため息をはきながら
眼鏡をテーピングしている左手の中指でくいっと上げた。
紫原くんは
ポテトチップスの袋を口の上に持って行き、
残りのカスをたいらげる。
赤司くんは手をくんで、
その前に立っていた。

「お待たせしました。」
「大丈夫ッスよ、じゃあ、帰ろう。」
「はい。」

一同は一斉に動きだした。
先頭を緑間くんが歩き、
その隣に赤司くん、紫原くんの順で左に並ぶ。
その後ろには僕と黄瀬くんが並んで歩き、
一番後ろの列には桃井さんと青峰くんが並んだ。
前の赤司くんと緑間くんは、
どうやら将棋の話をしているらしい。
その隣で紫原くんは
また新しいお菓子の袋をあけて黙々と食べ続けている。
後ろにいる桃井さんと青峰くんは、
バッシュの話をしていた。
隣に並ぶ黄瀬くんは、
いつもよりにやけた顔を僕に近づけた。

眩し過ぎます

「何ですか、黄瀬くん…。
　　顔が近いです。」

　すると黄瀬くんは声を小さくして、
　やはりにやけた顔で言った。

「昨日、あの後桃井っちと
　　なんか進展あったんスか？」

　予想はしていたが、
　まさかここでそれを聞くとは…。
　軽くため息をはくと、
　僕は小さい声でそれに答えた。

「何もないですよ。」

「えぇ!?何で!?」

　突然耳元で大声を上げた黄瀬くんは、
　なんとも言えぬ表情で僕を見つめる。

「なんで、と言われても…。」

　人差し指でぽりぽりと頬をかくと、
　黄瀬くんはうな垂れてため息をついた。

「はぁ…。てっきり昨日の、
　　そうだと思ったんスけどね…。」

「そう、とは？」

「告白ッスよ、
　　そんで付き合う事になりました～って感じ？」

「感じって…軽々しく言わないで下さい。」

僕が呆れて言うと、
黄瀬くんはふてくされて頬を膨らませた。

「だって、絶対桃っち
黒子っちの事好きじゃないッスか。
そう思って当然ッスよ～。」

その言葉にドキッとした。
やっぱり周りも勘違いをしているのか。
皆は知らないだろうけど、
桃井さんは本当は青峰くんが好きなのであって、
僕ではない。

一言に相棒と言っても、僕は影だ。
光には、遠く及ばない。

…自分の言葉に落ち込んでしまった。
僕はもう、決めたのに…。

「そうですか。」

黄瀬くんとの会話は、そこで途切れた。
ふと僕は後ろの二人の会話に、少し耳を傾ける。

「青峰くん、今日の夕食何食べたい？」
「あぁ？今日もいねぇのか、
俺んち。」
「うん、
自分の親の事くらい知っておきなよ。

私も今日は帰って来れないって言ってた。
だからご飯は二人で食べろって。」
「お前が作るのか…？」

青峰くんは顔をしかめて
恐る恐る聞いた。
桃井さんはキョトンとした顔を
青峰くんに向けて「そうだよ？」と言った。
すると青峰くんはたちまち黒い顔を沈ませて、
声を低くした。

「俺はコンビニで買って食う。」
「えぇ!?」
「何だよ‼」
「だってそうじゃん‼」

そう言い合いながらも、
二人は相変わらず歩調を崩さず並んで歩く。

そして僕はつくづく思う。

幼馴染みって、何なのだろうと。

僕はぼーっと二人を見つめる。

「……。」

黄瀬くんは緑間くんに絡み始めた。

「あ、緑間っち‼
今ため息ついたッスね‼酷いッス‼」

緑間くんは、それに仕方なく構う。
「別にしていないのだよ。」
紫原くんは変わる事無く
お菓子を頬張る。

赤司くんは列を下がってきて
僕の隣に並んで歩いた。

その時、青峰くんが少しダッシュして、
僕達を抜かす。
それを、バックを振り回して追う桃井さん。
その様子が、
どこと無く楽しそうに見えた。
最前列まで来た青峰くんは、
桃井さんの攻撃を受けてからまた歩き始めた。
これは考え過ぎだろうか。
青峰くんの歩調が、なんとなく、
桃井さんの歩調に合わせられている気がした。
僕が二人の様子をじっと見ていると、
隣で歩く赤司くんが僕に言った。

「テツヤ、お前はいいのか？」
「え？」

赤司くんは全て悟ったかの様に、
いや、悟っていたのだろう。
僕が桃井さんと会っていた事も、
僕が二人をどんな思いで見つめていたのかも…。

赤司くんの静かで、
僕を見透かした様な微笑みに、
僕は黄瀬くんの時みたいに誤魔化す気にもならなかった。
そのことすら、
無駄に思えてしまった。
僕はうつむき、
前の二人に聞こえないように、
小さな声で言った。

「赤司くんは凄いですね、
何でも見抜かれてしまいます。
……。」
「…まだ、好きなのだろう？
あれでよかったのか？」

赤司くんの鋭い問いかけに、
僕は一瞬うろたえたが、
すぐに落ち着いて、和やかな気持ちになった。

「はい…。
あれで、良かったんですよ。」
「…。」
「僕は…好きな人には、
本当に好きな人のそばで笑っていて欲しいんですよ。
それに…。
僕には、あの二人は眩し過ぎます。」

二人を見つめて、
僕は悲しく、嬉しくなった。
素直な気持ちだ。

赤司くんは、僕に「そうか。」といって微笑んだ。

「テツヤが自分でそれを選んだなら、
僕は何も言わないよ。
すまないね、余計な事を言った。」

「いえ。
正直、なかなか決心出来ていなかったんです。
あそこにいるのが、僕だったらって…
何度も、思ってしまって。
だから、今確認されて良かったです。
赤司くん、ありがとうございました。」

僕がお礼を言うと、
赤司くんはまた微笑んだ。
またあの二人を見つめて、
何とも言えぬ笑いが込み上げてきた事は、
僕と赤司くんしか知らない。

中2の、ある夏の出来事だった。

僕らはまだ
良かったですね

「へっぶしゅ!!」

朝の登校中、
偶然そこで会った青峰くんと歩いていると、
突然隣から大きなくしゃみの音が響いた。

「大丈夫ですか?青峰くん。
風邪ですか?」

「あぁ…。
なんか最近やばいんだよな…。」

「馬鹿は風邪を引かないと
いいますけど……良かったですね。」

「あん!?何だとテツ!!
…っ、ゴホッゴホッゴホッ…。」

青峰くんは怒鳴って咳き込んだ。
この様子には、さすがに驚いた。

いつもうるさい青峰くんが、
風邪を引くなんて…。

「お大事に。」
「…おう。」

昇降口へ行くと、
緑間くんが、靴を履き替えているところに出くわした。
こちらに気づいた緑間くんは、

何故かマスクを二枚重ねて装着していた。

「おはようございます。
緑間くん、
どうしたんですか…それ。
風邪ですか？」

僕がそう聞くと、
緑間くんは相変わらずテーピングされた左手で眼鏡をあげた。

「ラッキーアイテムなのだよ。
マスク二枚。
…なんだ、青峰。風邪か。
全く、よく当たる占いなのだよ。
青峰、
今日は俺の半径２ｍ以内に近寄るな。
移されたらたまらないからな。
自分の体調管理も出来ん奴は、
大人しく保健室へでも行くことだ。
帝光中バスケ部エースが
情けないのだよ。」

僕は黙って、
坦々と話す緑間くんの話を聞いていた。
ため息をつく緑間くんに
少し腹が立ったのか、
青峰くんは強い口調で緑間くんに言った。

「なんなら移してやろうか。
…ゴホッゴホッゴホッ!!」
「なっ!!やめろ青峰!!汚いだろう!!」

靴を履き替えて、
各教室へと向かった。

「青峰くん、良かったらこれ、どうぞ。」
「ん？なんだ？」
「のど飴です。ポケットに入っていたので。
古くはないですよ。
…あ、それともイチゴミルクの方がいいですか？」
「いらねーよ‼
ってか何でイチゴミルク持ってんだよ‼」
「…どうしてでしょう。」
「こえーよ‼」

そんなくだらない会話をしていたら、
あっという間に教室に着いた。

「じゃあな、テツ。飴サンキュー。」
「はい。また。」

青峰くんと緑間くんは同じクラスだから、
二人とは同時に別れた。

僕は誰にも気づかれずに教室に入り、席に座る。
すると直ぐに、
朝のＨＲの始まりのチャイムが鳴った。
授業は坦々と過ぎて行った。

昼休みは弁当を持って屋上へ向かう。
扉を開けると赤司くんと緑間くん、
まいう棒を沢山抱えた紫原くんが待っていた。

扉を閉めて三人の方へ向かって歩いていると、
赤司くんが声をかけてきた。

「テツヤ、今日はいつもより早いな。」
「はい。授業が早めに終わったので。」
「そうか、涼太と大輝を待とう。
ここに座れ。」
「ありがとうございます。」

赤司くんは紫原くんと赤司くんの間に
僕を座らせた。
赤司くんも紫原くんも、
お互いに背を向ける様にして座っている。
赤司くんはいつもと変わらない気がしたが、
紫原くんの方は何だか違ったように思えた。

な、何でしょう…。
何だか違和感が…。

ふと紫原くんを見上げると、
味の違うまいう棒を三本一気に口に頬張っていた。
どうやら拗ねているようだ。
また何かやらかして、
赤司くんに怒られたのだろう。
僕は丁度持っていたイチゴミルクの飴を
紫原くんに差し出す。

「…な～に～黒ちん。」
「あげます。どうぞ。」
「え～いいの～？ありがとう～。」

紫原くんはイチゴミルクの飴を受け取って、
僕の頭をわしゃわしゃとかき回した。

「やめて下さい。」

僕は紫原くんの手をはじく。

「あれ～、怒った～？ごめ～ん。」

少しは機嫌が良くなったようだ。
その後すぐに黄瀬くんが
げっそりした青峰くんを連れてやって来た。
その様子からして、
黄瀬くんは青峰の風邪に
気づいていなかったようだった。

幼馴染みって、何なんでしょうね

放課後になり、
僕は荷物を持って第一体育館へ向かう。
一軍専用体育館だ。
まだ少し慣れていない。
一軍レギュラーだと言う実感が
未だに湧いてこないのだ。
でも、迷ってはいない。
僕は僕の役目を自覚しているから。
そして、それを誇りに思っているから。

青峰くんには感謝している。
感謝したりないくらいだ。
けれど、何故か僕は心のどこかで彼に嫉妬している。
それは才能になのか、人間性になのか、
恵まれた環境にいる事を自覚していない事になのか…。
思い当たる点がいくつかあって、
僕は嫉妬と同時に、罪悪感を覚える。
その自分の身勝手さに、時折、腹が立つ。
僕は歯を食いしばって、頭を大きく振った。

僕は、影だ。
「キセキ」の影だ。
忘れてはならない。
皆がくれた誇りを。

更衣室で着替えを済ます。
バッシュの靴ひもを強く結ぶと、
力強く扉を開いた。

「え!?青峰くんが倒れた!?」

扉をあけたすぐそばでは、
桃井さんが緑間くんに驚いた顔で詰め寄っていた。
レギュラーメンバーはほとんど来ていたが、
紫原と青峰の姿だけ見当たらない。
黄瀬は赤司と練習表を眺めていた。
あわあわしている桃井さんを目のあたりにして、
何だか放っておける気がしなかった。

「どうしたんですか?」
「あ、テツくん‼
青峰くんが倒れたっんだって‼
朝いつもより早く学校いっちゃったから、
風邪ひいてるなんて知らなかった…。」
「朝から体調悪そうでしたよ。
のど飴をあげたのですが…
効かなかったみたいですね。」
「そうだったんだ。」

僕達がそう話していると、
緑間くんが呆れて言った。

「あいつなら今、
保健室で寝ているのだよ。
倒れた時、
丁度紫原が居合わせたから
運ぶように言っておいたのだよ。」
「それでむっくんも来てないんだ。
いつも赤司くんと来てるから、
サボったのかと思っちゃった。

…もーしょうがないなぁ。
じゃあちょっと様子みてくるね‼」

桃井さんは体育館を出て、
保健室のある校舎へと向かった。
緑間くんはふうと息をつく。

「しょうがないと言いつつ
心配などするから、
あいつも真面目にならないのだよ。」

僕はすかさず
桃井さんのフォローへまわる。

「でも、
桃井さんのいいところでもあるじゃないですか。」

すると緑間くんはため息をついて、
メガネをあげる。

「まぁそうだが。
…世話の焼ける幼馴染みを持つと
ろくな事がないのだよ。
あいつらをみていると、
つくづく不思議に思うのだよ。」

幼馴染み…。

緑間くんの言う通りだ。
いやいやでも、
何だかんだ心配して、

うっかり手を差し伸べてしまう。
あの二人の間で、
無意識にそれが成り立っている。
他所からみたら不思議で、
でも二人にとってはそれが普通で、
当たり前なんだと、
改めて思い知らされる。

「幼馴染みって…何なんでしょうね。」
「は？」
「いえ、何でもありません。」

翌日、青峰くんは学校に来なかった。

お邪魔します

「黒子。」
「どうしたんですか？赤司くん。」

放課後、僕が部活へ行こうと荷物をまとめていると、
赤司くんが教室を訪ねてきた。

「今日、青峰の様子を見てきてくれ。
部活は参加扱いにしておく。」
「え、あぁはい。分かりました。」

僕が承知すると、
赤司くんは考えるように手を口に持って行き呟いた。

「確か桃井も行くと言っていたな、
一緒に行ったらいいだろう。」
「分かりました。」
「それと…。」

赤司くんは手に持っていた
大きめの紙袋を僕に差し出した。

「これを、大輝に。」
「？」

そういうことで、
僕と桃井さんは青峰くんのお見舞いに行く事になった。

青峰くんの家に向かう途中、
桃井さんは朝の青峰くんの様子を教えてくれた。

「朝電話したんだけど、何か空返事でね？
家に行ってみたら廊下で倒れてるんだもん‼
ビックリしたよ～。」
「そうなんですか。
青峰くんも一応学校へ行こうと試みはしたんですね。
サボったのかと疑っていました。」
「あははっ、そうだね～。
青峰くんにしては頑張った方か～。」
「はい。」

そんな話をしているとすぐに
青峰くんの家に着いた。

青峰くんの家は白くて、
花壇の似合う綺麗な家だった。

青峰くんの家に向かう途中で桃井さんの家に寄った。
桃井さんの家も白くて
オシャレな洋式の家だった。

桃井さんは荷物を置いて、
青峰くんの夜ご飯を持って家から出てきた。

今日も青峰くんの両親は家に帰って
来れないそうだ。

桃井さんは慣れた手付きで
玄関の扉を開けて中に入る。
僕はその後に続いた。

ガチャッ

「青峰くーん？」
「お邪魔します。」

階段を上がり、
右に曲がって突き当りの部屋。
桃井さんがドアを開けると、
そこにはベッドで苦しそうに寝ている
青峰くんの姿があった。

それを見るなり桃井さんは静かな声で
僕に耳打ちした。

「私、夕飯置いて冷えピタとタオル持って来るね。
　テツくんはちょっと
　青峰くんの様子見て置いてくれる？」
「分かりました。」

桃井さんは遠慮なく家の奥に進んで行き、
僕は青峰くんの部屋に入って
桃井さんが戻って来るのを待った。

ドアが勢いよくバタンッと閉まり、
僕は少しやらかした気持ちになった。
その音は青峰くんの部屋中に
響き渡った。
もぞもぞと布団を動かして起きたのかと思うと、
ぼーっとした様子で天井を見つめる。

僕が部屋にいる事には

どうやら気がついていないようだ。

青峰くんは再び目を閉じて、眠りについた。

桃井さんがゆっくりドアを開けて戻って来た。
桃井さんは持って来た冷えピタを早速開けて
青峰くんの額に優しく貼り付ける。
するとその時、
青峰くんの口が微かに動いた。

そのままの意味だと思いますよ

「……ん、さつき？」

額にヒヤリとした冷たさを感じた青峰くんは
まだぼーっとした意識の中で言った。
僕は二人の雰囲気に少し嫉妬した。

「あ、ごめん。起こしちゃった？」
「いや……別に。」

幼馴染みで、お互いに特別な存在で、
離れることはない。
そう、確信しているように思えて…。

青峰くんはベットからのそっと体を起こすと、
不意に僕の姿を捕らえた。

「うおっ⁉テツ⁉いつから⁉」
「さっきからです。
体調は良くなさそうですね。
お見舞いに来ました。」
「あぁ…そうか。わりぃな。」
「はい、青峰くん体温計。
熱はかっておいてね。
着替え持ってくるからちょっと待ってて。」
「ん。」
熱で弱っているからだろうか、
いつもより桃井さんの言う事を素直に聞いている。
いつもの青峰くんなら、
お節介だのお前は俺の保護者かだのと

ことごとく口にするのに。
桃井さんが部屋を出て行って、
部屋には僕と青峰くんが取り残された。
「あ、そうだ。
これ、赤司くんから。」
そう言って、
僕は複雑な気持ちを隠すのに専念しながら
赤司くんに渡された紙袋を青峰くんに渡した。
青峰くんは紙袋を受け取ると、
早速開けて中に入っている物を取り出した。
僕も少々中身は気になっていた。
「…何だこれ。
まいう棒明太もち味？」
「赤司くんが言ってました。
メンバーからのお見舞いだそうです。」
「ってことは、紫原か？」
「みたいですね。
メモが付いてました。
『やっぱりわさびにすればよかった。』」
「意味わかんねぇよ‼」
青峰くんはそう怒鳴って
まいう棒を放った。
まいう棒を投げつける事にも体力を使うらしく、
異常に息を荒くしていた。
他にも袋の中には
面白い物がたくさん入っていた。

黄瀬くんからはスポーツタオル、
緑間くんからはブーブークッション、
赤司くんからは将棋の駒の飛車だった。
僕も個人的に手土産を持ってきていた。

「黄瀬くん被ってしまいましたね。
ちょっと悔しいです。」

自分のバックから大きめのスポーツタオルを取り出して
シュンとする僕に青峰君は
照れたように微笑んでくれた。

「気にすんな、ありがとよ。」

その笑顔に心が踊った。

「青峰くん、
このスポーツメーカー好きでしたよね。」
「まぁな、よく分かってんじゃねぇか。
にしても…緑間のは何なんだ？
ブーブークッションとか…。」

青峰くんは黄緑色のブーブークッションをつまみ上げた。

「ラッキーアイテムだそうです。」
「ふーん。赤司もなんだ？
飛車って…。意味わかんねぇ。」

ブーブークッションに続いて飛車の駒をつまみ上げる。
ベッドに胡座をかいて座り、ずっとそれを眺めていた。

「そのままの意味だと思いますよ。」
「ん？」
「この前、赤司くんに
将棋の駒の意味を聞いたことがあるんです。
その時に言ってました。」

僕の光
楽しいですか？

部活が急遽ｏｆｆになった放課後。
図書館に本を返し終えて教室に戻る途中、
生徒会室に残っていた赤司くんを見つけた僕は、
少し開いている生徒会室の扉をノックした。

「どうぞ…。黒子か。
　どうしたんだ？」

僕は扉を開けて中へ入った。

「赤司くんが生徒会室に残っているのを見かけたので、
　何をしているのかと。」
「そうか。」

生徒会室に入ったのは初めてだった。

帝光中学の生徒会室は
他の教室より少し豪華に出来ていて、
棚や窓には装飾が施されている。
赤司くんの後ろの窓は開いており、
穏やかな風が流れ込んできて生徒会室を包む。
まだ明るい外からは、
下校する生徒達の笑い声や
部活動に励む生徒達の姿が見られる。
空から生徒会室に光が注がれ、
赤司くんの後ろ姿が眩しく感じられる。

赤司くんが腰掛けている椅子にも、
装飾が施されている。
僕はその時、
あまりに違和感のない後ろ姿に魅入ってしまっていた。

「黒子。どうした？ぼうっとして。」
「…いえ。何でもないです。」

僕は少し恥ずかしくなって、
右手で顔を隠した。

ふと僕は赤司の手元に将棋盤を見つけた。
将棋盤の上にある駒はばらばらに並べられていた。
どうやら将棋をやっていたようだ。

「赤司くん、将棋をしていたんですか？」
「あぁ。これがなかなか難しくてね。」
「珍しいですね、
赤司くんが難しいなんて言葉を口にするなんて。」

僕が物珍しそうに見つめていると、
赤司くんは少し照れたように笑った。

「…そうだね。一人でやっている時なんかは、
自分の仕掛けた罠に引っかかってしまって、
よく頭を悩ませてしまうことがあるかな。」
「将棋って楽しいですか？
僕した事がなくて…ルールをよく知らないんです。」

赤司くんは少し瞳を見開いて驚いたような顔をした。
だが直ぐにいつもの穏やかな微笑みを作り、

将棋盤の端にある飛車を動かした。

「やってみるかい？」

「え、でも…。」

「ルールは僕が教えよう。

まずは駒の名前と進める場所を覚えるんだ。」

そう言って赤司くんは

王将、金将、銀将、香車、桂馬、歩兵、角行と、

僕に分かりやすいように教えてくれた。

「さっきも説明したけれど、

角行は斜め、香車は縦、そして飛車は縦と横だ。」

「飛車は随分と動ける範囲が広いですね。」

「これを上手く動かして王将を狙う。

そうだな…バスケ部員に例えると、

この駒は青峰かな。」

「青峰くん、ですか？」

「あぁ。

青峰は帝光バスケ部のエースだ。

動く範囲が広い分、

勝利に最も貢献してくれている。

勿論他のレギュラーメンバーの皆も

貢献してくれているよ。

だが攻める意味としては、僕にとっては、

王将（ゴール）を狙う際に飛車（青峰）は

欠かせない駒（存在）でもあるかな。」

そう言って赤司くんは飛車を見つめていた。

嬉しかったです

「あの時、
〝乱暴なエース青峰〟と言われていた青峰くんが、
〝帝光のエース青峰〟として
キャプテンの赤司くんに
認めてもらえたような気がして、
嬉しかったです。」

思わず笑みがこぼれた。

「テツ…。」

自分の光が認められた気がして、
本当に嬉しかったのだ。

青峰くんは乱暴で横暴だけれども、
バスケに対しては本当に誠実で、真剣で、
本当にバスケが大好きな人だ。

それはきっと
他の誰にも負けないくらいの情熱を
注いできているからなのだろう。

青峰くんがエースになった当時、
青峰の自分勝手な態度に反感を抱く者がいた。

青峰くんへの多少の嫌がらせも起こった。

青峰くんは気にしていなかったが、

その火の粉は桃井さんにも降りかかった。
影で悪口を言われたり、物を隠されたり、
机に落書きをされたりと、後で聞いて僕は驚いた。
だって桃井さんは、笑っていたから…。
何もないかのように、いつものように笑っていたから。
いじめの事を僕にも、青峰くんにも黙っていた。
一人で抱え込んで、
潰れてしまいそうになっていたのに…。
僕は、彼女の苦しみに気づく事が出来なかった。
ある日の放課後、
僕と青峰くんが一緒に部活へ向かっていた時の事だ。
桃井さんが体育館の端っこで、
上級生にバケツの水をかけられていた。
僕はその光景を目にして、
なんとも言えぬ怒りに似た感情がこみ上げてきた。
すぐ僕は青峰くんに声をかけた。
「青峰くん‼あれ‼」
その瞬間、
僕の隣から青峰くんが消えた。
「さつき‼‼‼おい‼てめぇらぁぁぁ‼‼‼」

青峰くんは上級生を殴り倒し、
盛大な喧嘩騒ぎを起こしてしまったのだ。
僕は桃井さんの所へ向かい、
着ていた上着を着せてあげる事しか出来なかった。

上級生を殴り飛ばす青峰くんは、
もはや我を忘れているようだった。

「ブッ殺す!!!!」

そう叫んで暴れていた。
何人かに地面に伏せられてもすぐに立ち上がって、
僕には青峰くんが、
青峰くんじゃない人に見えてしまった。
僕のすぐそばで、
桃井さんは涙を流しながら震えた声で繰り返す。

「大ちゃん!!もういいから……!!
やめて大ちゃん!!大ちゃん……!!」

あの涙は、喜びと、悲しみのどちらだったのだろう…。

その喧嘩騒動で、
青峰くんとその上級生は
停学一週間の罰を受けた。

青峰くんは
「あんなの普通だろ?別に気にしねぇし。」
と言って笑っていたけれど、
僕はあの時、戸惑ってしまったのだ。

水をかけられている桃井さんを見て、
頭にこなかった訳ではないのに…。

体が、動かなかった。

それに比べて青峰くんは、
反射的に桃井さんを助けに行った。

青峰くんは理屈じゃない。
本能のままの人だ。
良い意味でも、悪い意味でも。

そういう自由奔放な性格が、
僕は少し羨ましかったのかもしれない。

自ら光を放ち、
自由に動き回れる彼が、
眩しかったのかもしれない。

僕は限られた影でしか、
自由に動き回れないから…。

見つかりましたか？

「――――ッ。――――――テツ‼」
「え。」
「どうしたんだよ、
急に黙り込んで…。」

どうやら自分の世界に入り込んでしまっていたようだ。
僕は我に帰って返事をする。

「すみません。
考え込んでしまったみたいです。」
「なんだよ…驚かせやがって…。」

青峰くんはふぅと大きく息を吐いた。
僕はそんな彼を静かに見つめる。
やっぱり、眩しかった。

「赤司くんが言うには、
青峰くんは飛車、
緑間くんは角行、
紫原くんは金将、
黄瀬くんは香車、
僕は桂馬だそうです。」
「まぁなんとなく、テツが桂馬ってのは、
分かる気もするけどな。」
「それ、どういう意味ですか。」
「だってよ、お前って試合中も瞬間移動してるみてーに
ひょっこり現れるじゃねーか。
桂馬の特殊な進み方に似てるしよ。」

「…赤司くんは、もっと考えていると思いますけど。」
「それか、単に赤司が忘れやすい駒だったりしてな。
　　ははは っ。」
「いい加減怒りますよ。」
「悪りぃ悪りぃ。つい、な。」

　そんな事を語っていると、
　桃井さんが部屋に戻って来た。

「ごめんごめん、
　　青峰くんの服なかなか見つからなくて…。
　　いろんなとこに放ってあるんだよ？
　　どう思う？テツ君‼」
「うるせーな、
　　服なんてどこに置いても同じだろ。」
「青峰くん、服くらい整理して下さい。
　　散らかりますよ。」
「どーせさつきが片付けたんだろ。な？」
「もう‼私は家政婦じゃないんだよ⁉」
「へーへー。」

　青峰くんが、
　さっきより元気になった様な気がする。
　お見舞いの効果があったのかもしれない。

「それじゃあ、僕はそろそろ帰ります。
　　桃井さんはどうしますか？」
「私はまだ居るよ、
　　青峰くん危なっかしいし。」

　危なっかしい…。

「そうですか。」
「今日はありがとな、テツ。」
「いえ、早く学校来て下さいね。」
「おう。」
「私玄関まで行くよ。」
「ありがとうございます。」

青峰くんの部屋を出て、
玄関に着いた。
僕は自分の靴をしっかりとはいて、
桃井さんはそこら辺のサンダルをはいた。

「お邪魔しました。」
「私に言うのって、なんか変だよ～。」

桃井さんの笑顔。
やっぱり、眩しい。

「桃井さん。」
「ん？なに？」
「本当に好きな相手は…見つかりましたか？」
「……え？」

僕は真っ直ぐ桃井さんを見つめる。

逸らすな、逸らしちゃいけない。

夕日が頬にあたって暖かい。
桃井さんは少し黙って俯いてしまった。
そしてゆっくり顔をあげると、

いつもの優しい笑顔がそこにあった。

「まだよく分かってないけど、
　あいつには、私が着いていなくっちゃ。」

迷いはない。
彼女の意志がそこにはあった。

「そうですか。」

僕は小さく微笑んだ。

良かった。
これで、良かったんだ。
これでやっと僕の片思いになれる。

赤司くんの前で
「好きな人には
　本当に好きな人と幸せになってほしい」と
言ってはいたけれど、
やっぱり心の何処かで、
それが自分だったらと思ってしまう。
でも、
桃井さんのその人は、僕じゃない。

「これでようやく、
　貴方と対等でいられる…。」
「え？なに？テツくん？」
「いえ、なんでもないです。
　それじゃあ。」
「うん。明日学校でね。」

桃井さんに軽く手を降って、
僕は夕焼け色に染まる道を歩きはじめた。
ゆっくり歩いていた所為か、
夕日は沈みはじめて一番星が前方で輝いている。

諦めるつもりはありません。

でも、奪う気もありません。

あなたには強さも、賢さも望まない。

ただ、あなたに幸せであってほしい。

そう想う。

ただ、それだけなんですよ。

僕はすっかり暗くなった夜空を見上げて、
愛しく微笑んだ。

中2の、ある秋の出来事だった。

僕も知りません

ある日、僕は珍しい光景を目にした。
赤司くんと青峰くんが
部活以外で話しているところを始めて見た。
一体なんの話をしているのだろう…。

「なんだよ赤司、話って。」
「お前も気づいているだろ。
しらばっくれるな。」
「っ…。」
「……今の関係を壊したくない、か？
甘ったれるな、
それではテツヤの気持ちはどうする。
桃井の気持ちはどうする。」
「るっせなぁ、分かってんだよそんな事…。」
「お前の悪い所だ。
いざという時の判断が鈍る。
バスケにおいては何もいう事はないが、
人間関係において、
お前はまだ子ども過ぎる。」
「親父とおんなじ事言うなっての。」
「なら、よく考えるんだな。
このまま試合に支障を来たしても困るよ、
お前はエースなんだから特にな。」
「……。」

遠くて会話までは聞き取れないが、

深刻そうな様子だ。
青峰くんが悪さをして
赤司くんが叱っているのか、
もっと他の人物について
話し合っているのか…。

〝他の人物〟

そう言って最初に出てくるのは、
桃井さんの名前だった。
他に、誰がいるっていうんだろう。

あり得ない。

そう思えてしまうのも、
何だか少し悲しかった。

深刻そうな二人を見つめていたら、
体育館から桃井さんが
大量のタオルを抱えて飛び出してきた。

「あれ？テツくん‼どうしたの？
　こんな所にボーッとして。」
「桃井さん。いえ、何でもないです。
　すぐ参加します。」
「そう？ならいいけど…。
　あ、そうだ‼青峰くん知らない？
　さっきからいなくって。」
「青峰くんなら、
　あそこで赤司くんと話してますよ。
　何か用事ですか？」

「ううん‼用事ってまでもないんだけど…。
またかぁ…。」

桃井さんはタオルを抱えたまま、
肩を落とした。

「また、ですか？」
「青峰くん、
最近よく赤司くんに呼び出されてる
みたいなんだよねぇ。
理由聞いても教えてくれないし…。
テツくんは知ってる？」

驚いた。
あの桃井さんも事情を知らないなんて。

隠しているのだろうか？
でも、なんで？一体なんのために？

「いえ、僕も知りません。」
「そっかぁ、なんなんだろうね？」
「そうですね。」

すると桃井さんの背後に
紫原くんがいきなり現れた。

「ねぇ、さっち～ん。
マネージャーが呼んでる～。」
「あ‼そうだった‼ありがとむっくん‼
じゃあねテツくん‼また後で‼」
「はい。」

「いってらっしゃ～い。」

すると青峰くんと赤司くんの話が終わり、
二人ともこちらに戻ってくるようだった。
僕は何故か日汗をかいた。

「紫原くん、練習行きましょう。」
「え～？…分かったよ～…。
ていうか、何そんなに慌ててるの、黒ちん。」
「何でもないですよ。早く行きましょう。」
「ちょっと～、押さないでよ～。」

僕は紫原くんと体育館に入り、
着替えを済ませて練習に加わった。

光と影
僕は影になったんです。

練習を終えて部員が全員帰った後、
僕と青峰くんは居残り練習を始めた。

二人ともしばらくは無言で
それぞれの練習に打ち込んでいたが、
居た堪れなくなったのか
青峰くんから声をかけてきた。

「テツ、１ｏｎ１しよーぜ。」
「…お手柔らかに。」

別に喧嘩をしている訳ではない。

それでも、赤司くんとの会話が何だったのか
気になってしまい、
部活中は上手く話す事が出来なかった。
だから今、青峰くんにどう接していいものか、
グダグダと考えてしまう。
何か発そうとする度に言葉を選んでしまう。
こんな事でもやもやしている自分にも、
腹が立って仕方が無い。
本人が目の前にいるのだから、
直接聞けばいいことじゃないか。

「青峰くん。
今日、赤司くんと
何を話していたんですか？」

すると青峰くんは一瞬ギクッと体を揺らした。
どうやら、その話に僕が絡んでいるようだ。
それも、いい方向にではなく、悪い方向に…。

「僕が関係しているんですね、何ですか？
ヒソヒソされてもいい迷惑です。
ハッキリ言って下さい。」

青峰くんは参ったように、
恐る恐る聞いてきた。

「テツ、お前。
さつきのこと…どう思ってる？」
「好きですよ。勿論恋愛対象として。
気持ちだけなら、
君に負けてないと思います。」
「……。」

青峰くんは唖然と口を開けて黙ってしまった。

「なんですか？」
「い、いや…。
結構すんなり言ったからよ…。」

自信があったんだ。
負ける自信が。

こんな事はいいたくないけれど、
僕は気持ち以外で
青峰くんに勝てる気がしない。

「僕は気持ちを誤魔化したりしません。
　青峰くんは、どうなんですか？」
「……。」

青峰くんは一瞬
眉間にシワを寄せて、申し訳なさそうな顔をした。

「あからさまに申し訳なさそうな顔
　しないで下さい。イラッときます。」
「うおぉい⁉
　人が真面目にいろいろ考えてんのに
　お前なぁ⁉」
「…考える、なんて、
　君らしくないですよ。
　本能のまま、思うままに輝く。
　自由奔放な眩しい君だから、
　僕は影になったんです。」
「テツ……。」

青峰くんは俯いて、
ポケットに突っ込んでいた手が震えていた。

青峰くんの目は純粋なままだ。
きっと、僕の思いには
薄々気づいていたのだろう。
それでも、今の環境がきっと居心地良くて、
僕や桃井さんを傷つけたくなくて、
この現状に甘えていたかったのかもしれない。

「もう一度だけ聞きます、青峰くん。

君は桃井さんをどう思っているんですか？」

でも僕は、
そんな見せかけの安定なんていらない。
不安定でも、
確かな気持ちをお互いにぶつけ合って、
そこからまた安定した関係を築けばいい。

「お、俺は……。
テツやさつきを傷つけることは、
したくねぇだけなんだ…。
俺は…どうしたらいいんだよ？」

青峰くん……。
いつもは気の強い青峰くんが、
ここまでしょげているのをみて、
僕はふっと笑みをこぼした。

「青峰くんって、馬鹿ですね。」
「はあぁん⁉
人が真剣に言ってるってのに…!!」
「こんなことで、
僕が青峰くんや桃井さんを
嫌いになるわけ無いじゃないですか。
確かに僕は桃井さんが好きで、
桃井さんの気持ちは
どこか違う人の所にあります。
それでも、
僕はその人を嫌いになったり、
仲良くしなくなったりしません。
羨ましいなぁとは、

思うかもしれませんけど。
僕を、あまり見くびらないで下さいね。
いつまでも青峰くんがグズグズしていると、
僕がもらってしまいますよ？」

「⁉」

青峰くんの表情が崩れる。
その時僕は確信した。

彼は、ちゃんと彼女を見ていたのだと。

僕はふっと笑って、青峰くんを見つめた。
すると青峰くんも、
妙にぎこちない笑みを浮かべて、
ほっとしたようだった。

どうして

それから数日後、
青峰くんと桃井さんは
付き合い始めたようだった。
といっても、
特別なにをしているという訳でもなく、
多くの人は恐らく気がついていないだろう。
いつもと何ら変わらない、二人の関係。
別に言いふらすつもりもないし、
口止めされている訳でもないから、
僕はあえて触れないようにしていた。
少し見かけたのは、
珍しく青峰くんが中庭で昼食を食べていたところ。
その隣には多分、桃井さんがいたのだろう。
校舎の窓から中庭を見下ろしていたので、
すっかり葉の枯れ落ちた桜の木の幹で隠れて見えなかった。
でも、それでよかったのかもしれない。
部活では、あの二人がいる姿を、
見ようとしなくても目に入ってきてしまうのだから。

「さつきー、そこのタオルとってくれー。」
「ちょっと待ってー……はい、タオル。」
「ん、サンキュー。」

相変わらずの会話。
ちょっと変わった事といえば、
桃井さんは青峰くんの事を「大ちゃん」と
呼ぶようになったことと、
青峰くんは桃井さんに

よく怒鳴られるようになったことくらいだろうか。
まぁ、大した事ではなさそうだが…。

「あ、おいさつき。」
「ん？なに？大ちゃん。」

青峰くんは桃井さんの頭の後ろに
さっき受け取ったタオルを回し、
自分の方へと桃井さんの顔を近づけた。
そこから先はタオルの所為で見るに見えない。
まぁ、二人が上手くいったのなら、
それでいいのだが。
やっぱり、桃井さんには笑顔が似合う。
赤面して恥ずかしがる姿も
なかなか可愛らしいが、
僕は彼女の笑顔が一番好きだ。
見てるこっちまで、幸せな気持ちになる。

「もー‼大ちゃん‼」
「ははははっ、悪りぃ悪りぃ。」
「全然反省してないー!!」

僕は痛む気持ちを抱えながらも、
一種の達成感のようなものを感じていた。

これからもいつも通り、
三人で笑う事が出来るように…。

この気持ちは、複雑に彩って、
僕の中に渦巻く。

「黒子っち？大丈夫ッスか？
　なんか顔色悪いッスよ？」

心配そうな表情をした黄瀬くんが、
片耳のピアスを揺らして僕の顔を覗き込む。

「はい…。なんでもないですよ。」

そう言葉ではいいながらも、
僕の体は言うことを聞いてくれなかった。

「……っ、どうして…な、みだなんか…っ。」
「くっ!?黒子っち!?どうしたんスか!?
　なんで泣いて…!?」
「な、なんでも…ないんです……。
　なんでも…。」
「えっとぉ…えっとー…、
　い、一応保健室!!保健室行っとこう？
　ね？黒子っち。」
「…はい。すみません…。」

黄瀬くんに腕を引かれるままに、
僕は体育館を後にした。
零れ落ちる涙の隙間から、
あの二人が、複雑そうな表情をしているのを、
見たような気がする…。

辛いですよ。

黄瀬くんは僕をベッドに座らせ、
自分は近くにあった椅子に腰をおろした。

「何があったんスか、黒子っち。
流石に今日は『なんでもないんです』
じゃ納得しないッスよ？」
「……。」

黄瀬くんは僕の顔を覗き込み、
心配そうな、少し怒っているような顔を
向けてきた。

「えっ…と……。」
「黒子っち、前から様子変だったし、
何かあったのなら言ってほしいッス。
これでも心配してるんスよ。
もしかして…青峰っちと桃っちが関係してるんスか？」
「……珍しく鋭いですね、黄瀬くん…。」

流石に申し訳なくなったから、
今まであった事を話してみることにした。

「そっか…。あの二人、付き合い始めたのか…。
黒子っち、辛かったッスね。」
「でも、お蔭で少し気が楽になりました。
ありがとうございました。」

僕は部活に戻ろうとベッドから立ち上がる。

出入り口に向かおうと黄瀬くんの横を通ると、
いきなり腕を掴まれた。

「待って、黒子っち。
　でもそれって…付き合ってる二人を
　見てるのって、辛くないんスか？」
「……辛いですよ。」

そう。辛いんだ。
でも、それでも、
本当に幸せそうに笑う彼女を見てしまったら、
もうどう使用もないじゃないか。
僕じゃない誰かの隣で、
本当に、本当に幸せそうに
笑っているのだから。

あぁ、敵わないなぁ…なんて。

つい、思ってしまうのだから。

僕は赤くなった目を少しこすって、
微笑した。

「僕、何やってるんだろ…。」
「へ？」
「いえ…もう大丈夫ですから。
　ありがとうございました。
　黄瀬くんは練習に戻って下さい。
　僕は…少し横になってから戻ります。
　最近体調が良くなくて…。
　赤司くんに伝えといてもらえますか？」

「…了解ッス。
無理しないで本当に具合悪くなったら
家帰るんスよ？
そんじゃ。」
「はい、ありがとうございます…。」

保健室を出て行く黄瀬くんを確認した後、
座っていたベッドへ倒れ込んだ。
ドスンというベッドの重たい音が、
シンとした保健室に大きく響いた。
グラウンドに近い保健室ではいつもは、
陸上部や野球部のざわつきが聞こえてくるはずが、
今日は静かだ。
まるで、一人になりたい僕に
気を使っているかのように
僕が保健室を出て行くまで、
誰一人保健室に立ち寄る人はいなかった。

家につくと、家鍵が閉まっていた。
鍵をバックから取り出そうと漁っていると、
祖母が中から玄関の鍵を開けてくれた。
祖母は僕の泣き腫らした目を見て、
心配そうな表情を浮かべる。
平気な顔を作って、大丈夫だと言っても、
昔から祖母にはすぐに見破られてしまう。
共働きの両親以上に、
僕の世話をしてくれていたからこそ
なのかもしれない。

「なにか…あったのね？哲也…。」

大好きだったんです

「なにか…あったのね？哲也…。」

「おばあちゃんにはいつも…
見破られてしまいますね…。」

「そりゃあ、ずうっと見てきたからねぇ…。
あんたは昔っから、
表情が薄い子だったから。
よーく見とかんと、見逃すからねぇ…。」

「流石ですね…。」

「ほれ、早く入りなさいな。
あったかいこたつと、
美味しいみかんが待ってるから。」

いつも向けられているおばあちゃんの微笑みに、とても安心した。

僕はこたつに正座をして座り、
手を中に入れてこすり合わせた。

自分で思っていた以上に体が冷えていたようだ。

おばあちゃんが
台所からみかんを持って来てくれた。

「はい、みかん。」

「…ありがとうございます。」

昔から、
おばあちゃんにはなんでも

見透かされてしまっていて、
でも心配かけてはいけないと、
誤魔化してもすぐにまたばれてしまう。
そんなことの繰り返しで、
おばあちゃんだけには、
正直になんでも打ち明けるようになった。

「…僕、好きな人が出来たんです。
でも、その人には他に好きな人がいて、
その相手は僕の仲の良い友人なんです。
二人は、とてもお似合いで…。
はじめは…好きな人が、
本当に好きな人と幸せそうに
笑ってくれているのなら、
それでいいと思っていたんです。
でも……それが嫌だと思っている自分が
いることに気づいてしまいました。
僕は、好きな人の幸せを願えないくらい、
嫌な奴になっていたんでしょうか……？
…最近、僕は…自分がよく分かりません。」

おばあちゃんは優しく笑った。
シワの多い顔を、もっとしわくちゃにして。

「哲也…恋をしたんだねぇ……。」
「……？」

恋……？
嗚呼、そうか。
これが……。

「…はい……っ、でも、辛いです……っ。」
「辛いだろうねぇ…。
恋はよくも悪くも、人を変えるもの。
哲也は、どちらに変わるのかねぇ。」

恋をした、と……初めて自覚した。

おばあちゃんに言われて、
今まで苦しかったこの感情はなんなのだろうかと
考えていたけれど、
結局答えは見つからなくて、
どう表していいか分からない想いを、
〝好きだ〟という言葉でしか表現出来なかった。

そうか……僕は彼女に恋をしていたんだ。

今こうして辛くなっているのも、
彼女の笑顔に救われるのも、
自分の隣にいてほしいと思うのも、
相棒に嫉妬してしまうのも、
全部、僕が……彼女に恋をしていたからだ。

こんなの、
自分のキャラではないことは分かっている。
でも、
僕は本当に、桃井さんに恋をしていた。

「本当に…大好きだったんです……。」

好きでしたよね

翌日、僕は熱を出して学校を休んだ。
そう高くなかったのだが、
あれから柄にもなく号泣してしまったので、
目が赤く腫れ上がってしまっていた。

どうしようにも、
このままでは学校に行けるわけもない。
学校では、嫌でも桃井さんや青峰くんに会うことになる。
昨日、泣いているところを
黄瀬くんに見られていることもあって、
顔を合わせるのがなんだか気まずい。
会ったらきっと、根掘り葉掘り聞かれるんだろう。
それはさすがにキツイものもあって…。
また柄にもないことをしてしまいそうで…。

失恋して泣いて学校に行けないなんて、
なんて情けないんだと、
ベットで自分を卑下していると、
薬とタオルを持ってきてくれたおばあちゃんが
僕の部屋のドアをノックした。

「哲也…熱はどうだい？」
「おばあちゃん…。
　　はい、大分引いてきました。すみません。」
「謝らんでいいのよ。家族なんだから…。」
「……はい。ありがとう、ございます…。」

失恋して、おまけに熱もある。
そんな時の人の優しさは、

どうも心に染みてきてしまうもので、
僕は涙を堪えた。

「おばあちゃん…。
今度、お散歩にでも行きませんか。
今の時期はきっと、
運動公園の金木犀が咲いていると思います。
好きでしたよね、金木犀。」

濡らしたタオルで
僕の背中を優しく撫でながら
おばあちゃんは小さく返事をした。

「そうだねぇ。」

背中を拭き終えて、僕の服を交換する。
何もかも慣れた手つきで僕の世話をするおばあちゃんと、
青峰くんの看病をしていた時の桃井さんを重ねた。
一緒にいた時間が長ければ長いほど、
募るものがある。
そのことを、改めて感じた。

「……。」
「哲也、もう少し寝てなさい。
あとでお粥、持ってきてあげるからねぇ。」
「……はい。」

おばあちゃんが部屋を出て行ってから
1分も経たないうちに、僕は眠りに落ちた。

どんなに辛くても、

やめることなんて出来やしなかった。
例え叶わないことだったとしても、
僕は本当にどうしようもなく、
彼女に惹かれていったんだ。

こんなに溢れて仕方のない思いは、
一体どうしたら消すことが出来るのだろう。

「……。」

でも、消すことが出来るかどうかが
問題なのではないのだと、
自分でも、分かっているんだ。
このままでは、いけないのだと、分かっている。

だから、僕は自分にきちんと、
けじめをつけなければならない。

次、彼女に会ったら、告白しよう。
僕の全てをさらけ出して。
そして、きちんと振られよう。

今までずっと、誤魔化してきた。
僕はもう、逃げない。

大分楽になりました。

目が覚めたのは、夕方の5時頃だった。
大分体調も良くなっていたが、まだ体が熱を持っている。
試しに体温計で熱を測ると、やはりまだ熱があった。

「37度2分…か…微妙ですね…。」

高すぎず、低すぎない。
中途半端な治り具合だ。
もう少し寝たほうがいいだろうか。
早く治して、明日には学校に行っておきたい。
これ以上部活に支障をきたしていまうのも心苦しいし、
何より桃井さんに自分の気持ちを早く伝えてしまいたい。
伝えて、早く、楽になりたい。
こんなにたくさん考えたんだ。
きっとどんな結果が出たとしても、
素直に受け入れることが出来るはずだ。
覚悟は、もう、決めているのだから。
僕がそんなことを考えていると、
部屋のドアがノックされた。

「…はい。」
「おや…起きていたんだね。哲也。」

そっとそのドアを開けたのはおばあちゃんだった。
眼鏡をかけていたので、
リビングで縫い物でもしていたのだろうことは
安易に想像出来たが、
その眼鏡をかけたままと言うことは、
何かしらの急用があるのだろう。

「はい。大分楽になりました。」
「そう…。」

おばあちゃんはほっとした表情を見せた後、
自分のポケットの中から僕の携帯を取り出した。

「この携帯、哲也のでしょう？
さっきこたつの上で電話がなってたから
急いで来たんだけれど…
もう足も遅くなってしまったものね…。
途中で、切れてしまって。」
「あんまり走らない方がいいですよ。
ただでさえ足が悪いのに…。気をつけて下さい。
電話は、大丈夫ですから。」

そう言って、僕は布団から立ち上がり携帯を受け取った。

「ありがとうございます。」
「早く治して、学校、行かないとね。」
「…はい。」

僕の決心を見透かすようなおばあちゃんの言葉に、
僕は深く頷いた。
ピシッとしなければ。
いつまでも、甘えていられない。
僕の生まれて初めてのの恋を、
何も言わずに応援してくれたおばあちゃんに、
僕なりの意思を、姿勢を見せなければならない。
青峰くんとも、ちゃんと向き合わなければならない。
すると、家のインターホンの音がした。

おばあちゃんが玄関に出ると、
背の高い帝光中の制服を着た男の姿があった。
僕は部屋からそっと除くようにしていたから、
その程度までしか分からなかったが、
その声には嫌というほど聞き覚えがあった。

「あらあら、大きいのね。」
「あの…テツ、いますか。」
「あ…青峰くん…？」

思わず口を溢れた僕の言葉は、
シンとしたその空間には酷く大きく響いてしまった。

「テツ？」

僕の存在に気づいた青峰くんは、
何かを決意したような強い眼差しを、
真っ直ぐに僕にぶつけてきた。
僕はその瞬間、
目をそらすことが出来なくなってしまった。
逃げてはいけないんだと、
この時決心させられてしまった。

覚悟なんて、とっくの昔に出来ています。

「……。」

「……。」

沈黙が苦しい…。

な、なにか話題を…。

「あ、青峰くん。

何か用でしたか？」

「あぁ…ちょっとな。

ちゃんと、お前には言っておかねーと思って…。」

きっと、桃井さんのことだ。

「その前に、僕からひとつ言わせてください。」

僕のその一言で、

青峰くんはまた

何かを覚悟したような目を

僕に向けた。

真っ直ぐ、迷いのない顔で。

「僕は、明日…桃井さんに告白します。

そのことを、承知してもらえますか？」

青峰くんは眉をぐっと寄せてから、かはっと口を開いた。

「っ……。

ははははっ、やっぱり、

お前にはかなわねぇなぁ…。」

青峰くんは安堵したように、足を崩して力を抜いた。
僕は、それと同時にキョトンとした。
こんな風に笑った青峰くんを見たのは、
いつぶりだろうか…。
最近の僕達は、
何処かぎくしゃくしていて、
お互いにいたたまれなくなっていた。
一人の愛しい人を思っているだけなのに、
どうしてこんなにも
僕達が睨み合わなければならなかったのだろう。
僕達の友情は、こんなに脆いものだったのだろうか。
いや、違う。
ただお互いに、お互いを恐れていただけなのかもしれない。
僕達の友情が壊れてしまうことを。

「あぁ、分かったぜ。
でもなテツ、あいつはオレのもんだから。
覚悟しておけよ。」
「覚悟なんて、とっくの昔に出来ていますよ。」

お互いに負けない意志を確認し、
熱い視線を交わしあった後、
僕達はまた笑っていた。

「…でも、嬉しかったです。
君から、ちゃんとその言葉を聞けて。」
「ん？なんだよそれ。」
「桃井さんも、青峰くんも、
自分の本当の気持ちには鈍感なんですよ。
少し前に、

桃井さんからはもう答えを教えてもらっていたので、
後は君の問題でした。
君は、いざと言う時の判断が鈍る人ですから、
こんなふうに真正面からぶつかってきてくれたのが
とても嬉しかったです。」
「…赤司にも同じことを言われた。
今の関係を壊すのが怖くて迷ってるんじゃねぇかって…。
そういう判断が鈍いから、早く自分で解決しろってな。」

最近赤司くんに呼び出されていたのは、
それが原因だったのか。
少なからずどころか、もろ僕関係の話だったじゃないか。
青峰くんはきっと、
この三人の関係が好きだったのだろう。
付かず離れず、信頼という名の元集っている関係。
僕らの関係の根底にあったものは恋愛感情ではなく、友情。
その輪から外れてしまったら、この均衡は崩れてしまう。
青峰くんなりに、
そうならない方法を探していたのだろう。

「でも、青峰くんなら、
もっと時間がかかると思っていました。」

青峰くんはなんだよそれ、と少し拗ねた様子だった。

「…でも確かに、オレ一人で考えてたら、
もっと時間がかかったかもしれねぇな…。」
「…桃井さんですか？」
「さつきもだけどよ、赤司がな。」
「…赤司くんが？」

片鱗

君達を祝福できるようになるために。

「昨日、お前が帰った後、赤司と話したんだよ。
話したっつうか、呼び出されたって感じだけどな。」

「青峰、お前、どうするつもりなんだ？」
「なんだよ、いきなり…。どうするって、何をだ？」
「黒子を取るのか、桃井を取るのか。」
「はぁ!?」
二人の間に、少しの沈黙が続いた。
すると赤司くんが違うな、と頭を抱えて言った。
「言い方を変えようか。お前は、桃井が好きか？」
「んなっ!?…当たり前だろ！付き合ってんだから…。」
青峰くんは即答した。
その焦った様子に、赤司くんはクスッと笑い、
再び青峰くんに問いかける。
「ふふっ…そうか。じゃあ、
黒子に桃井のことをどう思っているか聞かれたとき、お前は何を考えた？」
「何を…って。」
青峰くんは、僕と、桃井さんのことを考えたらしい。
僕を傷つけないように、でも、桃井さんも傷つけたくない。
今の関係を続けるにはどうしたらいいのかを、必死になって考えていたという。
「青峰、お前のそれは気遣いかもしれないが、黒子にとって、
その優しさは残酷すぎる。その優しさは、お前の黒子への甘えだ。」

「赤司にそう言われて、はっとした。

テツの考えが分かった気がした。
お前はこの関係を、終わらせたかったんじゃないかって…。」
青峰くんは俯いている。
声が少し、震えている気がした。
君は、僕を、恐れていたんだ。
「青峰くんにしては、冴えてますね。」
全く、本当に、馬鹿なんですから。
見た目の割に、繊細なところ、ありますよね。
「僕は早く、この関係を終わらせたかったんです。
このままじゃ、君とも桃井さんとも、
対等にいられないじゃないですか。
僕がいつまでたっても惨めですよ。全く。
だから、一度壊してから、また築きたかったんです。
君達との関係を。
僕が心から、君達を祝福できるようになるために。」
優しさは、時に残酷だ。
青峰くんも、桃井さんも。
不器用で、優しくて、眩しい。
「青峰くん。桃井さんを泣かせたら、殴りますから。」
「随分と強気だな!?」
「勿論です。」
明日、桃井さんに告白する。
振られることは分かっている。
けれど、この想いも止められない。
早く伝えて楽になりたい。
報われようとは思っていない。
彼女が笑っていられるのなら、僕は、今心から、
その幸せを願うことが出来る。
「ごめんなさい」と、言われるだろうか。
困らせてしまうだろうか。
いや、その心配は、きっとない。

僕や青峰くんと同じように、彼女もきっと、
揺るがない想いを持っているはずだから。

少しだけ、

中2の冬が、始まろうとしている。
僕は昨日青峰くんに宣言した通り、桃井さんに告白した。

「急に呼び出してしまって、すみません。」
「ううん、大丈夫だよ。どうしたの？」
いつもの、優しい笑顔。
人気の少ない一軍体育館裏の少し開けた木の下に、
僕は桃井さんといた。
少しの沈黙。
聞こえてくるのは、校庭で活動する野球部とサッカー部の声。
今日は体育館の修理があるらしく、
バスケ部一軍は二軍の体育館にスペースをかりている。
僕は赤司くんに長めの休憩時間をもらって、
桃井さんを連れ出した。
すると赤司くんは、
ついでに一軍体育館の様子を見てきてくれと、それは少し悪戯に微笑んで。

「あの…桃井さん。」

心臓が痛い。
自分の気持ちを伝えるということは、こんなにも、
緊張して、熱くて。
こんなにも、恐ろしいことなのか。

「うん…テツくん。」

その笑顔に、僕は何度も救われてきた。
言わなくていい、と。

分かっているよ、と。
そう言ってくれているようなその笑顔に、
僕は、何度も言葉を飲み込んできた。
そうやって、なんでも察してくれようとするから、
僕は君の優しさに甘えてきてしまっていた。
嗚呼、なんて、なんて素敵なんだ。
こんなにも自分が彼女を好きだったのかと、
今になって気がついた。
好きだ。好きだ。好きだ。
嗚呼こんなにも、君が好きで好きで、たまらない。
そのセミロングの髪も、触れるとこんなに暖かい。
驚いたように見開く目が、僕を映す。
愛しくて愛しくて、泣いてしまいそうだ。
今だけ、今だけでいい。
ほんのこのひと時だけ。
君に触れることを、どうか…許してほしい。

溢れてくる感情が止められなくて、
気がついたら僕は彼女を抱きしめていた。
「テ、テツくん!?」
「すみません桃井さん…少しだけ、今だけこうさせてください。」
「……。」
困っていることは、何となく分かっていた。
けれど、本当に今だけ。
君を想わせていてほしい。
この手を離した瞬間、君への気持ちを打ち砕くことを約束するから。
「…!」
桃井さんの手が、僕を背を慰めるようにさすった。

それはまるで、今にも泣きそうな子供をあやすように。
僕は自分を情けなく思うと同時に、嬉しくなってしまった。
きっと、彼女は僕の気持ちを否定しない。
気のせいだとも、思い違いだとも、
勘違いだとも言わないだろう。
きっと、ただ、僕の気持ちを受け入れてくれる。
返すこともなく、拒否することもなく、
受け入れて、それは宝物のように大事にしてくれるのだろう。
そういう人なんだ。
この人は。
そういう人だから、好きになったんだ。

僕は桃井さんから手を離し、彼女から一歩遠ざかった。

「全く…かないませんね、桃井さんには。」

そう僕が微笑むと、桃井さんもまた、優しく微笑んだ。

「桃井さん…僕は、桃井さんのことが好きです。」

大好きでした

「僕は、桃井さんが好きです。」
真っ直ぐ目を見て、それはもう真剣に、
桃井さんに気持ちを伝えた。
一瞬驚いたように目を見開いた桃井さんは、
優しい目をして、言葉を返してくれた。

「うん…ありがとう、テツくん。
…ありがとう。」

「貴女のその目が、好きでした。
貴女の笑顔が好きでした。
強くて、優しくて、僕を支えてくれる、
そんな素敵な貴女が、大好きでした。」
本当に、心から、君の幸せを願うことが出来る。
「だから、幸せでいてください。
僕は、心から、貴女の幸せを願っています。」
「うん…うん……っ。ありがとう、テツくん。」
桃井さんの目からは、涙が溢れていた。
泣くまいとしている彼女が愛おしくて、
恋しくて…でも、不思議と苦しくはなかった。
僕のために、彼女は涙を流してくれているのだ。
僕の代わりに、僕の気持ちを洗い流してくれている。
それは、僕の気持ちを大事にしてくれている証拠だ。

「あはは、泣かないでくださいよ、桃井さん。」

僕の心は穏やかだった。
僕はハンカチを取り出し、彼女の涙を拭った。
「テツくん…ありがとう…。」

まるで子供のように泣きじゃくる桃井さんを、
僕はひたすら慰めていた。
全く、おかしな話だ。
さっきまでとは、まるで立場が逆じゃあないか。
きっとこれも、僕達らしくていいのかもしれない。
「これからは、そうですね。
桃井さんの父親替わりにでもなりましょうかね。」
「ち、父親!?」
「冗談ですよ。」
「もう!テツくんったら…。」
そんなやり取りをした後、僕達は笑い合った。
失恋したというのに、僕の心は軽かった。
何だか開放された気分になっていた。
以前は、桃井さんの隣に立っているのが
僕だったらいいのにと思っていたのが、
今では誰かの隣に立つ桃井さんを、
後から眺めていたいという気持ちになった。
彼女の歩く先を、恋人ではないけど近い距離で、
見守っていけたらいいなと、思うようになっていた。
可愛くて、愛しくて、大切な人。
余計な恋愛感情は一切無く、
ただただ愛でていたいという素直な気持ち。
過去の初恋の相手。
その存在を大切にすることは、いけないことだろうか。

僕は桃井さんに手を差し伸べた。

「戻りましょうか、桃井さん。」
「そうだね、テツくん。」

桃井さんは僕の手をそっと取って、

いつものあの笑顔を向けてくれた。
いつも真っ直ぐに向き合ってくれる彼女となら、
僕は今後も付き合っていけるだろう。
それは恋人ではなく、友人でもなく、
大切な人として。
また甘えてしまうかもしれない。
傷つくかもしれない。
でも、それでも、
僕は桃井さんと一緒にいたい。
彼女を大切に思う者として、彼女の幸せを守れる男になりたい。